

Title	Poetiques de Musset (Cerisy 2010) Satsue KANOSE : L'Homme des Masques,Musset au Japan : ミュッセ生誕 200 年記念国際シンポジウム (14-21.8.2010)日録『ミュッセの詩学 : スリジ 2010』
Author(s)	鹿瀬, 颯枝
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.22-No.1, 2012.9 : 15-18
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=4000
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

Poétiques de Musset (Cerisy 2010)

Satsue KANOSE : *L'Homme des masques*, Musset au Japon

ミュッセ生誕 200 年記念国際シンポジウム (14-21.8.2010) 日録

『ミュッセの詩学—スリジー 2010』

鹿瀬 颯枝

「私のグラスは大きくないが、私は自分のグラスで飲む」と言い切ったミュッセは、生涯を通して、驕りのない詩を綴り、観客のいない一人で読む劇を好み、人間味あふれる自分自身のレシを淡々と書き続けた。古典主義とかロマン主義とか、いかなる流派にも属することを拒んだ世紀児を文学史は後世に《ロマン主義の鑑》とした。

そういうアルフレッド・ド・ミュッセ (1810–1857) の生誕200年を記念して、2010年8月14日から21日までの1週間、北仏ノルマンディーの古城スリジー・ラ・サルCerisy-la-Salleにて国際シンポジウムが開催された。通常、シンポジウムといえ、2, 3日のスケジュールを組み、大学内で開催されることが多いが、今回はミュッセにふさわしく、規模として大きくはないが、こだわりのプログラムで、研究者同士が充分に交流できるように1週間も人里離れた場所で寝起きを共にしながら進められた。当然、研究発表者の選考は厳しく且つ丁寧に行われたようだった。栄えあるミュッセティスト、ミュッセティアンとして、日本からは私が招かれて研究発表することになったのだが、一人1時間30分の持ち時間を与えられているので、フランス語の準備が大変だった。しかし、結論から述べると、とてもユニークで内容の濃いシンポジウムであり、全員の研究発表をまとめた*Poétiques de Musset – Cerisy 2010*の出版 (2012年秋に出版予定) を今から心待ちにしている。

この1週間は、朝8時から21時30分まで連日、修行僧のような生活であったが、まさに我が人生最高の集大成となった研究発表の場であり、世界のミュッセティストたちとの出会いであり、新たなスタートでもあった。



北仏ノルマンディーの古城スリジー・ラ・サル

2010年8月14日 (土) パリ→ノルマンディー 22℃

パリからサン・ラザール駅16時10分発のシェルブール行 (シンポジウム関係者たちに指定された列車) に乗って、ノルマンディーへと向かう。出発早々にエンジン・トラブルか何かで30分の遅れ。乗り継ぎのリゾンLison駅で待っていてくれるはずの列車は既に出発した後で、ホームでただ待つこと50分。この間に大勢の学会関係者たちと雑談をしながらいち早く仲良くなる。目的地のカーランティルCarantilly駅 (この小さな駅、普段列車は止まらない無人駅、国際学会などで大勢人が降りる時のみ例外的に止まるのだそう) 19時12分到着の予定が、21時着! 会場のスリジー城から城主直々にお出迎えの大型バスに乗ってお城へ。夕食は21時半から。先に車で到着し、じっと待っていたメンバーも遅れて着いた我々も既にぐったりで食事の会話もいまひとつ盛り上がり欠けた。各人、広大な敷地内に点在する部屋に案内された後は、皆、速やかに就寝だったと思う。

2010年8月15日（日）スリジー・ラ・サル

朝8時15分に朝食時間を知らせる本館の鐘が鳴る。どれくらいの広さだかまだ想像もつかないが、全体で60部屋以上もある各建物（本館以外に、オランジュリー、厩舎などが心地よく改装されて雰囲気のある客室になっているが、どの部屋にも鍵はない！）から各々が本館にやってくる。8時15分から9時15分まで朝食。9時半から研究発表、12時半から14時半まで昼食。午後の研究発表。19時30分から21時30分まで夕食。その後1時間半ほど、スリジー城について三代目城主の説明を聴きながら城内一周することになる！今日も爆睡。

2010年8月16日（月）スリジー

早寝早起きの健康的な生活、そして、鍵の要らない暮らしが一週間続くことになる。三代目城主によれば、城の敷地内では自由に何の心配もなく暮らせませす、嘗て盗難も事件も全く起きたことはありませんと誇らしく語る！研究発表の会場は図書館、サロン、グルニエと分かれるが、それぞれ発表にふさわしい機材が整っている部屋を選ぶので、かなり移動もすることになる。今日は、シンポジウム・メンバー全員の集合写真。最前列中央に座らされる。たった一人の日本人だから、なにかと目立つようだ。



城主(中央)によるスリジー・ラ・サル一帯の案内



グルニエで行われた朗読会、大喝采をあげる主役たち

2010年8月17日（火）スリジー

一日中、雨。恒例のスケジュールを終えて、21時からグルニエでミュッセの朗読会Lecture « Il faut qu'une porte soit ouverte ou fermée »をやるといふ。大喝采を浴びて終了。私の扇子が唯一の小道具だった。打ち上げはカーヴでポルトとマルティーニで乾杯。最高に盛り上がったのは、杯を片手に皆で楽しんだ引用ゲームjeu de citation. 一人がある作家の名文を声高らかに引用すると、それを誰の名文かを言い当てるゲームで、勿論、私も参加。サン＝テクジュペリ、コルネイユ、デュラスの名文を引用してみた。どれも即答されてしまった。最後にデュラスの『これでおしまい』で閉会。こんな知的な遊びができるなんて、やっぱりミュッセの仲間たちだ！

2010年8月18日（水）スリジー

午前中のスケジュール終了後は、フリー・タイム。毎日、朝から晩まで行動を共にしているのだから、もうメンバーは皆ファースト・ネームで呼び合う間柄になっている。主催者側の狙いは見事に大当たり。私はジセルたちとクータンヌ Coutanceのカテドラルを見に行く。その後、足を延ばしてノルマンディーの海 グランヴィル Grandvilleへ出る。ノルマンディー上陸作戦の舞台

だ。夕食の鐘が鳴っている19時30分になんとか滑り込みで帰って来て、美味しそうな香りが漂うテーブルに直行。既に私のテーブルに着席していた顔ぶれは、ミュッセの館を買った夫妻、イヨネスコの娘、スリジーの城主、なんとも豪華なメンバーだった。

2010年8月19日（木）スリジー

明日の発表の準備をしないと。。。気持は焦っているのに、シルヴァンたちに誘われて、夕食後に「月夜の散歩Une promenade au claire de la lune」と相成った。今回の主催者フランク、シルヴァン、ジゼルに加えて、朗読会で話題を呼んだソフィー、明日の発表者フローランスと私、司会担当のオリヴィエたち。素敵な散歩のお蔭で心身ともに落ち着き、ぐっすりと眠れた。

2010年8月20日（金）スリジー

今日は、私の研究発表日。どうか落ち着いて良い発表ができますように。朝から落ち着かない。ビデオ撮り予定が記録用のSDカードを忘れて不可能になり、録音予定が充電用の専用USBを忘れてこれまた不可能！いずれもパリに置いて来てしまった、日本からはきちんと持ってきていたのに、スリジー出発前に、パリでシンポジウム用機材をチェックしなかったせいだ。でも午後一番となった私の発表はとても順調に進んで行った。14時30



研究発表前夜に月夜の散歩！



本館前でホッと一息のコーヒー・タイム

分から1時間余の発表+『ロレンザッチョ』の一部紹介（ロレンゾが刀をみて気絶するシーン）、質問30分間は会場から、フランク、シルヴァン、オリヴィエ、フローランスたちの《エール》と全体について細部における質問、ミュッセの館に住んでいるアンヌ・マグランの日本の面についての質問、イタリアはミラノ出身のヴァレンティーナ・ボンゼットによるロレンゾの衣装についての具体的な質問などなど。ビデオはブラジル人の若い研究者マルコスが録画、録音はスリジーがすべての講演を録音しているとのこと。先ずは一安心。

2010年8月21日（土）スリジー

午前中に全体のまとめ&コメント。そのなかに私の発表にとっても好意的なコメントがあった。日本からは唯一の発表者だったから、きっと皆さん好意的なのだ。大事にされていると感じた1週間だった。14時27分リゾン発の列車に間に合うように早めの昼食を取ったが、ぎりぎりまで別れを惜しんで、そして来年3月16日「ミュッセ研究の一日 Une journée d'étude sur Musset」（於：ルーアン大学）での再会を約束して別れた。

2011年3月14日（月）大宮

今日は、「計画停電」の初日。3日前の3月11日（金）14時46分、東日本全域を襲った未曾有の大震災……。まだ言葉すら見つからない状態。本来ならば、今朝、成田からパリに向けて出発していたはず。当然のことながら、今後のすべての予定を変更。まずは、フランスの関係者に私がルーアンに行けないこと、私自身は無事であるけれど、日本は大変な状況になっていることだけをメールで知らせた。2日後、シンポジウム当日は日本へのお祈りから始めたとの報告、ルーアン大学から。感謝。鍵すら要らない穏やかで幸せな暮らしを共にした仲間たちからの温かいメールが続いた……。

（かのせ さつえ 聖学院大学人文学部欧米文化
学科教授）